高　等　学　校

平成 30 年度

教育研究員研究報告書

芸術（音楽）

東京都教育委員会

目　次

Ⅰ　研究主題設定の理由 ･････････････････････････ 1

Ⅱ　研究の視点 ･････････････････････････････････ 2

Ⅲ　研究仮説 ･････････････････････････････････ 3

Ⅳ　研究方法 ･････････････････････････････････ 3

Ⅴ　研究内容 ･････････････････････････････････ 6

Ⅵ　研究の成果 ･････････････････････････････････ 23

Ⅶ　今後の課題 ･････････････････････････････････ 24

研究主題	生活や社会の中の音や音楽、音楽文化と幅広く関わる力を身に付けさせるための授業と評価の在り方

Ⅰ　研究主題設定の理由

平成30年度の教育研究員の全体テーマは、「『主体的・対話的で深い学び』の実現に向けた授業改善」であり、高等学校部会の研究テーマは「これからの時代に求められる『資質・能力』を育むための授業改善と学習評価の充実」である。

平成28年12月21日の中央教育審議会答申（以下、「中教審答申」と表記。）では、「とりわけ最近では、第４次産業革命ともいわれる、進化した人工知能が様々な判断を行ったり、身近な物の働きがインターネット経由で最適化されたりする時代の到来が、社会や生活を大きく変えていくとの予測がなされている。“人工知能の急速な進化が、人間の職業を奪うのではないか”“今学校で教えていることは時代が変化したら通用しなくなるのではないか”といった不安の声もあり、それを裏付けるような未来予測も多く発表されている。」との問題意識が示されている。

このような「複雑で予測困難な時代」とも言える現代社会をたくましく生きていくために、変化を前向きに受け止め、社会や人生、生活を、人間ならではの感性を働かせてより豊かなものにし、現在では思いもつかない新しい未来の姿を構想し、実現することができる生徒を育成していく必要がある。音楽の授業を通して、子供たちがこれらの力を身に付けることができるような指導を行っていく必要があると考える。

これまでの音楽教育を通して、「音楽の学習は、生活を明るく豊かにすることに役立つ」ことは、多くの生徒が実感している現状があると言える。一方で、「音楽の学習をすれば、普段の生活や社会に出て役に立つ」と生徒に実感させることについては、より一層の充実が求められる。生徒自身が、「なぜ高等学校で音楽を学ぶのか、音楽の授業を通して何を学び、何ができるようになるのか」を実感できるような指導方法や評価を充実させていくことが喫緊の課題である。

高等学校部会の研究テーマは「これからの時代に求められる『資質・能力』を育むための授業改善と学習評価の充実」であることから、芸術（音楽）における「資質・能力」とは何かを明らかにし、共通理解することから研究を開始した。

最初に、高等学校学習指導要領芸術（音楽）編（平成30年３月）（以下、「学習指導要領芸術（音楽）編」と表記。）では、各学年の目標を踏まえて、芸術（音楽）では「音楽の幅広い活動（音楽Ⅰ）」や「音楽の諸活動（音楽Ⅱ・Ⅲ）」を通して、音楽的な見方・考え方を働かせ、生活や社会の中の音や音楽、音楽文化と幅広く関わる資質・能力」を育成することを目指すとされていることを確認した。次に、学習指導要領芸術（音楽）編の内容を踏まえて、部員自身のこれまでの授業実践を振り返りながら、音楽の学習における現状と課題を挙げ、以下のようにまとめた。

【現状】

・表現及び鑑賞の活動の学習過程を通して知識を身に付けさせたり、意図に基づいて表現

を試す中で技能を身に付けさせたりする場面の設定が不十分である。

・自己のイメージを音楽表現に生かすための思考力、判断力、表現力等の育成が不十分である。

・生活や社会の中の音や音楽、音楽文化に主体的・協働的に幅広く関わろうとする資質・能力の育成が不十分である。

【課題】

・他者と協働しながら、音楽表現に必要な知識及び技能を身に付ける学習過程の評価を充実させることが必要である。

・感性を働かせ、思考力、判断力、表現力等を音楽表現に活用する力を身に付けることが必要である。

・生活や社会における音や音楽の働きについて関心をもち、自己の思いや意図と関連付けて理解を深めることが必要である。

これらの現状と課題を踏まえて、全体テーマである「『主体的・対話的で深い学び』の実現に向けた授業改善」の中でも、特に「主体的・協働的な学び及びその評価の在り方」に着目することにした。中教審答申には、「人工知能がいかに進化しようとも、それが行っているのは与えられた目的の中での処理である。一方で人間は、感性を豊かに働かせながら、どのような未来を創っていくのか、どのように社会や人生をよりよいものにしていくのかという目的を自ら考え出すことができる。（中略）答えのない課題に対して、多様な他者と協働しながら目的に応じた納得解を見いだしたりすることができるという強みを持っている。」とある。

また、芸術（音楽）に関する中教審答申の中には、「『対話的な学び』の実現のためには、一人一人が『音楽的な見方・考え方』を働かせて、音楽表現をしたり音楽を聴いたりする過程において、互いに気付いたことや感じたことなどについて言葉や音楽で伝え合い、音楽的な特徴について共有したり、感じ取ったことに共感したりする活動が重要である。客観的な根拠を基に他者と交流し、自分なりの考えを持ったり音楽に対する価値意識を更新したり広げたりしていく過程に学習としての意味がある。」と示されている。

従来、芸術（音楽）においては、例えば合唱や合奏を通したグループ学習や、人との関わりを通して音楽のよさを実感する活動を重視してきた。今後、課題の発見・解決に向けた主体的・協働的な学び（いわゆる「アクティブ・ラーニング」）の視点に立ち、活動と学びの関係性や、活動を通して何が身に付いたのかという観点から、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善や学習評価の充実を進めることがより一層求められると考える。

以上の経緯により、研究主題を決定し、その指導方法を研究して授業改善及び学習評価の充実を図ることとした。

Ⅱ　研究の視点

本研究においては、音楽における「資質・能力」を、学習指導要領に示された育成すべき三つの柱を基に、研究構想図に明記した三点として位置付けた。この資質・能力を身に付けさせるために、授業と評価の両面から、新たな指導の在り方を探究していく。

視点１（授業）：他者と協働した学び

これまでの音楽教育においては、音楽のよさや楽しさを感じ、思いや意図をもって表現することなどに関しては充実した成果が見られる一方、他者と協働しながら音楽表現を生み出すといった部分においては不十分な面も指摘されている。そこで、協働的な学びをより重視した授業を実践することにより、生徒が音楽を価値あるものとして感じ取り、音楽によって生活や社会を明るく豊かなものにしていく態度を育成できると考えた。

視点２（評価）：学びの過程に重点を置いた評価方法

本研究部員の経験上、高等学校音楽科の学習評価の現状は、筆記や実技の試験を実施して学習の成果を評価するといった方法を採用していることが比較的多いと見られるが、生徒によって音楽に関する知識及び技能に差がある現状において、適切な評価であるのかという点を問題として提起した。今回、他者との協働（視点１）を授業で実践するに当たり、協働する場面を評価することは、学びの過程を評価することにほかならないと考え、適切な評価方法を研究することとした。

Ⅲ　研究仮説

音楽科の学習の多くは、他者との関わりの中で行われることを大切にしている。表現及び鑑賞の学習において、生徒一人一人が自らの考えを他者と交流し合い、互いの気付きを共有したり、感じ取ったことなどに共感したりしながら個々の学びを深め、音楽表現を生み出したり音楽を評価してよさや美しさを味わって聴いたりできるようにすることが、今後、より重視されていく。授業の中で、歌う、楽器を演奏する、音楽をつくる、聴くなど様々な音楽の活動を、他者と協働することによって深める場面を設定することで、主題が達成できるのではないかと考えた。

また、他者と協働する場面がある授業において、最終的な成果を評価するとしても、他者と協働しながら学んでいる場面にこそ、評価すべき事柄（「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「主体的に学習に取り組む態度」）が存在するのではないか、また、その過程を適切に評価することにより、生徒は音楽を学ぶ意味やその価値を感じ、主体的に音楽と幅広く関わる学びに向かう力を育成できるのではないかと考え、以下の仮説を立てた。

１　協働的な学びの場面を工夫することで、音楽や音楽文化と幅広く関わる力をより一層身に付けさせることができる。

２　学びの過程を重視することで、生徒の主体的に学習に取り組む意欲をより適切に評価できる。

Ⅳ　研究方法

研究を行うに当たり、主題に基づいて取り扱う学習内容を、生活の中の音や音楽、社会の中の音や音楽、音楽文化の三点に着目し、それらについて幅広く関わる力を伸ばすことを目的とした。部員が所属する、各学校の生徒の実態に合わせて三点の中からねらいを精選し、協働的な学びを取り入れた授業改善と学習評価の充実を図ることとした。その上で部員が共通して取り組む内容を以下に示した具体的方策として設定することで仮説を検証できるよう

にした。

1　授業改善の具体的方策

(1)　導入において、教員からの発問により本時で扱うテーマ・ねらい・学習形態と評価方法を明示し、授業の見通しをもたせる。

本研究では、「主体的・協働的な学び」を重視しており、ねらいを簡潔に明示し、生徒が対話的な学びや活動に抵抗感なく取り組めるよう配慮する。また、「この授業を通して何ができるようになり、何が分かるようになったのか」を生徒が実感しながら他者と協働して学びを深められるよう、学習形態や学習内容、評価方法を事前に伝えることで授業の見通しをもたせ、課題を解決するために必要となる知識及び技能を意識できるようにする。

(2)　生徒が音や音楽をより身近に感じられるよう、歌や口唱歌（くちしょうが）など実際の生活や社会の中で古くから取り入れられてきた音楽の伝承方法を意識した指導を行う。

音楽を歌や言葉、口唱歌（くちしょうが）を取り入れて、より言語的に捉える指導法を工夫し、生徒一人一人がこれまでに学んだ知識や感性を生かして主体的・協働的な学びに取り組めるようにする。言語的な観点で音楽を捉えることで、生活や社会の中の音や音楽、音楽文化の存在や意味に気付かせる。

なお、口唱歌（くちしょうが）は、学習指導要領解説において「我が国の伝統音楽を扱う場合には、口唱歌（くちしょうが）を用いることによって」と定義付けられているが、本研究では伝統音楽のような一つの作品になる可能性も踏まえ、創作の分野でも口唱歌（くちしょうが）を呼称するものとする。

(3)　音楽的な見方・考え方が、協働的な学びを経てどのように変容したかを確認する。

協働的な学びの場面の前後で題材から感じ取ったことをそれぞれ記述させ、その変容を見取ることで協働的な学びを経てどのような力が身に付いたかを把握する。具体的には①自分自身の見方・考え方を他者に伝えようと努力しているか、②他者の見方・考え方に触れて自身の見方・考え方が広がりを見せているか、といった２点に注目する。また、ここで述べている他者は生徒同士、教員と生徒、あるいは題材の作者と生徒など、幅広い関係性を含むものとする。さらに、生徒が自身の変容を実感できるよう、ワークシートを返却する際には、生活や社会の中の音や音楽、音楽文化と幅広く関わる力が伸びたと判断できる箇所にコメントを付けるなどして生徒へ還元する。

2　学習評価の具体的方策

(1)　音楽的な見方・考え方を働かせながら、他者と協働し課題を解決しようとする場面を幅広く設定し、生徒の変容を観察により評価する。

(2)　ワークシートから協働的な学びの過程を見取り、言葉や歌、口唱歌（くちしょうが）を取り入れた指導を行ったことで、主体的・協働的な学びが成り立ち、主体的・対話的で深い学びが実現したかについて評価する。

(3)　学びの過程が見取れるよう、学習の様子を短時間で記録できる用紙を作成するとともに、評価の観点を明確にした教員用評価シートを用い、生徒の学びの深まりを適切に評価する。

研究構想図

全体テーマ　　「『主体的・対話的で深い学び』の実現に向けた授業改善」

高校部会テーマ
「これからの時代に求められる『資質・能力』を育むための授業改善と学習評価の充実」

音楽科における「資質・能力」とは
・生活や社会の中の音や音楽、音楽文化と幅広く関わるための知識及び技能を身に付けること。
・身に付けた知識及び技能を生かし、自己のイメージをもって音楽表現を創意工夫すること。
・音楽的な見方・考え方を働かせ、生活や社会の中の音や音楽、音楽文化に主体的・協働的に幅広く関わること。

高校部会テーマにおける現状と課題
【現状】
・音楽の知識及び技能が受動的な学習にとどまり、主体的・協働的に生かそうとする力が不十分である。
・思考力、判断力、表現力等を活用して、自己のイメージを音楽表現に生かそうとする力が不十分である。
・生活や社会の中の音や音楽、音楽文化に主体的・協働的に幅広く関わろうとする力が不十分である。
【課題】
・他者と協働しながら、音楽表現に必要な知識及び技能を身に付けることが必要である。
・感性を働かせ、思考力、判断力、表現力等を音楽表現に活用する力を身に付けることが必要である。
・生活や社会における音や音楽の働きについて関心をもち、自己の思いと関連付けて理解を深めることが必要である。
【テーマ設定のための着眼点】
生活や社会の中の音や音楽の働きを理解するために、生徒同士が主体的・協働的に音楽の幅広い活動に取り組むことが重要である。そのような活動を通して個々の学びを深める授業と、それを適切に見取ることができる学習評価の充実に着目した。

高等学校芸術（音楽）部会主題	生活や社会の中の音や音楽、音楽文化と幅広く関わる力を身に付けさせるための授業と評価の在り方

仮　　説
協働的な学びを取り入れた授業と学びの過程を重視した評価の充実を図ることで、生活や社会の中の音や音楽、音楽文化と幅広く関わる力を身に付けさせることができる。

具体的方策
・授業のテーマやねらい・学習形態を明示し、題材を理解するために活用できる音楽を形づくっている要素とその働きを意識させ、他者と共有したり協働したりして課題を解決する場面を設定する。
・歌や口唱歌の知識及び技能を生かした協働的な学びを経て、思考力、判断力、表現力等が深まっていく様子が見取れるよう、学びの過程を記録できるワークシートを工夫する。
・観点を明示した教師用評価シート等を作成し、生徒の学びの過程を評価するとともに、事前に生徒へ評価の観点と場面を明示し、学びに向かう意欲を喚起する。

検証方法
・音楽的な見方・考え方を働かせながら、他者と協働し課題を解決しているかを観察により判断する。
・ワークシートの記録を比較し、協働的な学びを経て思考力、判断力、表現力等が深まったかを検証する。
・評価シート等により、協働的な学びを通して生徒に幅広く音楽と関わる力が身に付いたかを検証する。

Ⅴ　研究内容

実践事例Ⅰ

教科名	音楽	科目名	器楽	学年	２～４年次

(1)　題材名、使用教材

ア　題 材 名　互いに音を合わせて合奏を作り上げよう

イ　使用教材　楽譜（パート譜）『塔の上のラプンツェル』より『輝く未来』（ハ長調）（曲目は、本題材第１時において生徒たち自身の話し合いにより決定したもの）各楽器（ピアノ、サキソフォン、フルート、ギター、ウクレレ、ベース、ドラムセット、シロフォン等）

(2)　題材の目標

楽器の演奏を学ぶ中で、「音楽や音楽文化と幅広く関わる」ため、自分たち自身で意見を出し合い選曲することにより、生徒が十分に親しみを感じられる楽曲を扱う。選んだ楽曲を自分たちで演奏できる喜びと共に、生徒同士でのアンサンブルに取り組むことで、主体的・対話的で深い学びを実現し、生活や社会の中の音や音楽、音楽文化と幅広く関わる力を身に付けさせる。

(3)　題材の評価規準

ア　知識及び技能	イ　思考力、判断力、表現力等	ウ　主体的に学習に取り組む態度
楽曲の構造や背景について理解し、自ら受け持つパート（楽器）について曲にふさわしい奏法や、他者との調和を意識して創造的に器楽表現するために必要な技能を身に付ける。	楽器の特性や、楽曲の構造やフレーズ、他パートとの関わり合いなどについて、創作活動も含めどのように表現するか考え、知識・技能を生かして創意工夫を深める。	生徒が相互に協働するアンサンブル演奏と、これを皆で協力し演奏発表するという一連の活動の中で、積極的に音楽性豊かな表現を追求する態度を伸ばす。

(4)　題材の指導と評価の計画（９時間扱い）

時間	学習活動	評価の観点			評価規準（評価方法など）
		ア	イ	ウ	
第1時	楽器の基礎的な奏法を学ぶ。 皆で意見を出し合い課題曲を決める。	●	●	●	【ア】楽器の練習に取り組む。（観察） 【イ】どのような楽曲がふさわしいか考える。（観察・ワークシート） 【ウ】積極的に意見交換をする。（観察、ワークシート）

第2～5時	パート決め、個人練習をする。 合奏練習をする。	●	●	●	【ア】受け持つ楽器の練習に取り組む。（観察） 【イ】楽器の特性、パートの役割を考えて演奏する。（観察・ワークシート） 【ウ】他の音と合わせながら合奏に参加する。（観察・ワークシート）
第6時（本時）	間奏部として、各自アドリブ演奏をしてみる。 合奏練習をする。	●	●	●	【ア】即興演奏に必要な技能を身に付ける。（観察） 【イ】弾くべき音を考える。演奏計画図を書く。（観察・ワークシート） 【ウ】アドリブ・ソロが輪番でスムーズに進んでいくよう皆で協力・工夫する。（観察・ワークシート）
第7～9時	発表に向け、楽曲を仕上げる。	●		●	【ア】各自の演奏技能を上げる。（観察） 【ウ】本番に向けて協力して練習する。（観察・ワークシート）

(5)　本時「アドリブに挑戦！」（全９時間中の６時間目）

ア　本時の目標

(ｱ)　アンサンブルの中でアドリブ（即興）による独奏をする。

(ｲ)　独奏を盛り立てる伴奏をする。

イ　仮説に基づく本時のねらい

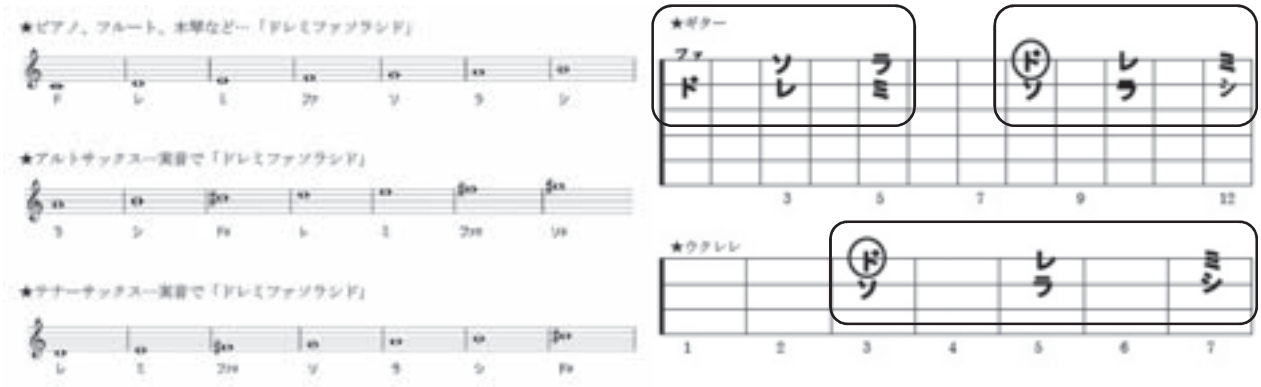
「主体的・対話的で深い学び」を実現するため、本研究において掲げた音楽科にとっての資質・能力である「生活や社会の中の音や音楽、音楽文化と幅広く関わる力」を育成するには、「協働的な学びのある授業」及び「学びの過程を重視すること」が効果的なのではないかとの仮説を立てた。音楽的な見方・考え方を他者と共有し互いに個々を高め合うことこそが、主体的・対話的な学びであると考える。このような学びを充実させるため、協働する場面を設定した授業と、その過程を評価する方法を研究する。

本時では、創造的に器楽表現をするため、創作の活動を取り入れる。合奏の中で、自らが主役になることを経験でき、また、よりアンサンブルを意識する活動ができる。音楽性豊かな表現を追求する態度にまで高めたい。

ウ　指導の工夫

コードに沿って弾く等、理論的な内容は割愛し、鍵盤楽器は原則白鍵だけを弾くように、管楽器等の移調楽器は実音がハ長調になるように、また、ギター等の弦楽器は５～６箇所程度に限定されたポジションの中で弾くよう指導する（［資料１］参照）。本時では即興演奏を課題の中心とすることから、演奏技能についてはできる限り平易に取り組めるよう工夫する。

［資料１］使用できる音を指定したプリントの一部



エ　本時の展開

時間	学習内容・学習活動	指導上の留意点	評価規準・方法
導入 ５ 分	合奏練習をする。 （これまでの授業の復習）	お互いを目視できる形でグループ合奏させる。 （互いにコミュニケーションをとらせる。）	
展開Ⅰ 10分	間奏部分（８小節）で、アドリブによる旋律を弾く。 ・使える音を確認する。 （プリント［資料１］） ・まずは「ドだけ」で旋律を即興で弾いてみる。次に「ドとレだけ」というように、徐々に使用音を増やす。最終的に、プリントに指定してある音を使って弾けるようにする。	生徒に、まずは挑戦してみようという意欲をもたせるため、以下のような工夫をする。 ・鍵盤楽器は白鍵のみ、弦楽器は使用する音を５～６個程度に限定する。 ・単音や２つの音だけでも旋律として十分成り立つことを実感させる。	【ア】観察 【イ】観察
展開Ⅱ 15分	・個人練習 ・一人ずつ順番にソロを弾く。 （８小節の間奏部分を繰り返す） ・「演奏計画図」記入（ワークシート）	・質問に応じたり、戸惑っている様子があれば声をかけたりと、必要に応じ個別指導する。 ・教師又は生徒の一人が伴奏をする。 協働的な学びの場面 ＊各自がソロを受け持つ小節数を変えたり（２～８小節）、生徒の弾く順番に変化をつけたりと、生徒の進捗に合わせ、できる限り多様なパターンを経験させる。	【ア】 観察 【イ】 観察 ワークシート

展開Ⅲ 10分	合奏練習 本時で取り組んだ間奏（アドリブ・ソロ）部分を含めて、本番を意識して合わせる。	生徒が演奏しやすいように、きっかけの合図や、励ましの言葉など、適宜、声掛けをする。 協働的な学びの場面	【ウ】観察
まとめ 5分	本時の振り返り、まとめ 片づけ	演奏発表する目標に向け、本時で学習した内容も含め、自信をもって取り組んでいけるよう意欲を喚起する。	

(6)　本時の振り返り

ア　協働的な学び

本題材、本時の授業に限らず、音楽科は協働的に学ぶ場面を多く設定しやすい教科である。特に協働的である活動の一つとして、合奏（アンサンブル）が挙げられる。本題材の授業は、個人での練習（主体的な学び）と合奏練習（対話的な学び）の往還といった活動に、生徒は毎時間取り組んだ。コミュニケーションを取ることが苦手な生徒たちが、アドリブ・ソロを輪番で演奏していく場面において、アイコンタクトやボディランゲージ等でのコミュニケーションといった、言葉でなく音楽で会話をするような姿が見られ、それは他者との調和を目指す態度や、主体的で音楽性豊かな表現活動を引き出すことにつながった。

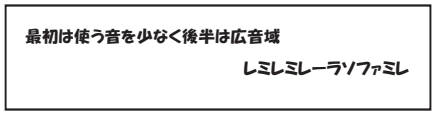
イ　学びの過程

即興演奏は、その場で旋律を創作し即発表するという演奏活動であり、生徒たちが戸惑って演奏に取り組めないという状況も予想された。そこで本時では、徹底的にスモールステップでの学習になるよう計画した。例えば、まずは「ドだけ」、次に「ドとレだけ」と次第に使える音を増やしながら、限定された音数の中で即興的に旋律を奏でてみるといった進め方である。生徒が簡単だと思える課題を冒頭に課したことで、生徒はスムーズに学習に参加することができた。その後、即興演奏といっても単に自由に楽器を鳴らすのではなく、音楽的な表現を伴って演奏できるよう、ワークシートに演奏のイメージ（演奏計画図：［資料２］参照）を自由に書かせた。

［資料２］生徒のワークシート例

≪生徒Ａ≫

≪生徒Ｂ≫



≪生徒Ｃ≫

本時の活動の中で、生徒たちなりに頭に浮かんだ音のイメージをワークシートに書き込もうという積極的な姿勢が見られた。更に学習を進め、生徒もこの状況に慣れ、音楽的なフレーズや、指導者の想定以上のアドリブ・ソロが見られるようになると、次のような演奏計画図も書けるようになった。与えられたソロの時間（８小節）を、旋律、構成、強弱といった音楽を形づくっている要素を用いて書き表している。他者と協働した

学びの過程で、生徒が主体的に見出した図である（［資料３］参照）

［資料３］生徒の演奏計画図の例

ウ　評価について

本題材では、まず、生徒同士で意見を出し合い課題曲を設定することで、意欲的に取り組む動機付けとした。合奏に至る学習においては、生徒それぞれが自分のパートに責任をもって練習するとともに、即興演奏を加え、思いや意図を合奏の中で表現する活動に取り組ませた。このように、生徒が主体的に他者と関わる活動を積み重ねていく授業を行うことで、生徒の変容が観察でき、その過程を評価することができた。

即興演奏のアイデアを可視化するワークシートは、図の作成もスモールステップを重視し、短いフレーズを演奏したり書いたりする活動を繰り返して、少しずつ長い旋律につなげていくようにした。図に書くことで音の高低や強弱に気付かせやすくし、全体の中での盛り上がりや構成を考えさせることを目的として作成しており、生徒は、ワークシートを活用した学習の中で、実際の演奏技能と相互に影響し合いながら、演奏計画図がより具体的に変容していく様子が見て取れた。

楽器の演奏技能については、生徒の経験によって個人差がある。そこで、生徒にとってなるべく未経験で、演奏技能だけでは解決できない創造性などを課題とし、あえて制約を設けることで取り組みやすく工夫し、これを協働的に学ばせることによって、学びの過程を観察することができた。最終的に、生徒たちが自ら選曲した曲を、自分たちで美しく楽しんで演奏できたという達成感が、生徒の様子や感想文等から見て取れた。この生徒たちの音楽に向き合い、創意工夫をしようとする気持ちの変化こそが、学びに向かう力になっていくと考えられる。

実践事例Ⅱ

教科名	芸術	科目名	音楽Ⅰ	学年	１学年

(1)　題材名、使用教材

ア　題材名　　「声と口唱歌を使って音楽をつかまえよう」

イ　使用教材　ワークシート、鑼鼓などアジアの打楽器等

(2)　題材の目標

・アジアの鑼鼓音楽を教材とし、声や口唱歌を用いた創作活動を通して、身近な社会の中の音や音楽に幅広く関わる力を育む。

(3)　題材の評価規準

ア　知識及び技能	イ　思考力、判断力、表現力等	ウ　主体的に学習に取り組む態度
アジアの鑼鼓楽器や西洋楽器の音や奏法の特徴を捉え、声や言語で模倣することができる。	音素材の特徴を生かして、イメージをもって主体的・協働的に音楽をつくることができる。	アジアの鑼鼓楽器や西洋楽器の音及び奏法に興味をもち、自らの感性を働かせて積極的に創作活動に参加している。

(4)　題材の指導と評価の計画（４時間扱い）

時間	学習活動	評価の観点			評価規準 （評価方法など）
		ア	イ	ウ	
第1時	・教師が演奏した鑼鼓や西洋打楽器の音を、声や言語で模倣する。 ・各人が聴きとった音とその表現をグループ内で比較し、より共通理解が図られ、イメージを共有しやすい声や言語での表現を精選していく。	●			【ア】アジアの鑼鼓楽器や西洋楽器の音及び奏法の特徴を捉え、声や言語で模倣することができる。 （ワークシート）
第2時	・楽器の様々な奏法を試し、作品に生かせそうな奏法を探究し、それらをグループで協働しながら声や言語での表現に置き換えていく。	●			【ア】アジアの鑼鼓楽器や西洋楽器の音及び奏法の特徴を捉え、声や言語で模倣することができる。 （ワークシート）
第3時	・音楽様式について学び、創作に生かす。 ・作品で表現するテーマを定め、創作に取り組む。		●		【イ】音素材の特徴を生かして、イメージをもって主体的・協働的に音楽をつくることができる。 （行動観察、ワークシート）

第4時(本時)	・中間発表会に向けて創作と発表準備を行う。 ・中間発表会を通して、感じ取った表現方法の違いをワークシートに記述する。			●	【ウ】アジアの鑼鼓楽器や西洋楽器の音及び奏法に興味をもち、音楽的な見方・考え方を働かせて積極的に創作活動に参加している。 （評価シート、ワークシート）
第5時	・中間発表会で感じ取った表現の多様性を生かして創作を仕上げる。 ・完成した作品を試演する。		●	●	【イ】音素材の特徴を生かして、イメージをもって主体的・協働的に音楽をつくることができる。 （ワークシート） 【ウ】アジアの鑼鼓楽器や西洋楽器の音や奏法に興味をもち、音楽的な見方・考え方を働かせて積極的に創作活動に参加している。 （行動観察、評価シート）

(5)　本時（全５時間中の４時間目）

ア　本時の目標

声や言語に置き換えた楽器の音色を生かして、表現するテーマに沿った音楽を主体的・協働的に創作する。

イ　仮説に基づく本時のねらい

(1)　音楽的な見方・考え方を働かせながら、他者と協働し、課題を解決していく場面を設定する観点から、課題を解決していく過程でより学びを深められるように、他者と協働する場面を各時間に設定した。また、協働的な活動に生徒自身が意義を見いだせるよう、個人的に課題に取り組む場面の前後に協働する場面を挟むように工夫した。

(2)　協働的に学ぶ場面の前後を比較し、変容を見取るワークシートを工夫する観点から、協働的に学んだことによる生徒の変容を見取るために、前後の活動が適切に記録に残るよう、ワークシートや協働的な学びの場面での授業観察の在り方を工夫した。授業観察においては、見取る観点を明確にし、簡潔に記録できる評価シートを教師が持ち、効率よく生徒の学びの深まりを評価できるようにした。

(3)　学びの過程を評価する場面及びその方法を工夫し、生徒に明示する観点から、導入時に必ず本時のねらいと評価をする場面を生徒に示す。更に今後の見通しを伝え、最終的な題材の目的を生徒と共有していく。

ウ　本時の展開

時間	学習内容・学習活動	指導上の留意点	評価規準・方法
導入 5分	前時までの確認 ・創作のテーマと構成がどの程度練られているか確認し、今後の進め方を助言する。	・テーマや構成は厳密でなくても構わないが、どのような作品を作りたいのかが伝わるよう中間発表を行うよう伝える。	
展開Ⅰ 25分	中間発表準備 ・作品を創作する。 ・中間発表に向けて役割分担を確認する。 ・口唱歌（くちしょうが）による演奏を行う場合はその練習をする。	協働的な学びの場面 ・作品の創作は 15 分～20 分を目安とする。テーマに従って音楽的な見方・考え方を働かせ、作品を作り上げるよう助言する。 ・役割分担を確認する時間は５分～10 分を目安とする。 ・一部分でも構わないので、できる限り発表の際に口唱歌（くちしょうが）で試すよう促す。	【ウ】 評価シート
展開Ⅱ 15分	中間発表と振り返り ・グループごとにワークシートを基に発表を行う。 ・他グループの作品の特徴を記録する。 ・中間発表を通して感じ取った表現の多様性から、自分たちのグループの作品の改善点を話し合ってまとめる。	対話的な学びの場面 ・良い表現を感じ取ったら積極的に記録するように促す。 ・質疑応答の場を設けて積極的に発言するよう促し、生徒全員で共有させる。	【ウ】 ワークシート
まとめ 5分	本時のまとめと次回の予定 ・ワークシートを仕上げて提出する。	・次回の内容を予告して終了。	

(6)　本時の振り返り

ア　協働的な学び

中間発表に取り組む際、グループ間で協働的に学ぶ場面を設定したことで、互いに多様な感じ方、意見に触れることができ、さまざまな音や音楽の捉え方を学ぶことができた。また、口唱歌（くちしょうが）を取り入れたことで音楽創作に対する抵抗感を和らげることができた（資料４参照）。日常的に用いる声や言葉を用いた創作に取り組むことで、より音や音楽を身近に感じ、社会や生活の中の音や音楽に主体的に関わろうとする姿勢を育むことができた。

［資料４］　創作活動に口唱歌（くちしょうが）を取り入れることの有用性が見取れる記述

口だけで音を出して、合わせて作った曲を本当の楽器で演奏してみたら、すごく完成していて、びっくりしました。きちんと曲を作れたのでとてもうれしかったです。

イ　学びの過程

中間発表に置いて工夫した点をプレゼン形式で行った点も生徒の思考力、判断力、表現力等を高めるために効果的であった。様々な意見をまとめる手法や発表のアイデアもグループごとに異なるため、他のグループの実践に触れることで、自分たちのグループの作品を更に深めようとするきっかけとなった（［資料５］参照）。

［資料５］　生徒のアイデアがより具体的に変容している様子が見取れる記述

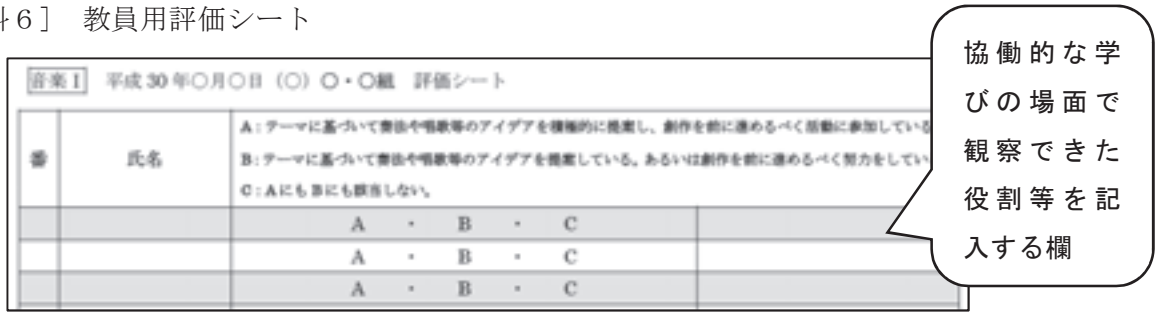
曲のイメージ、テーマ、コンセプトを音楽にするために工夫したこと

中間発表前の記述	中間発表後の記述
・だんだん音を大きくしたり増やしたりする。 ・おまつりをイメージしてにぎやかに。 ・明るく楽しい感じに。	・最初はおまつりに人がたくさん来る感じで、マラカスやドレミパイプなどをたくさん入れて、最後の方はおまつりが終わって人々が帰ってゆく感じをイメージする。

ウ　教員が場面観察において生徒の取組を可能な限り正確に見取るための評価用シートについて、内容を工夫した。見取るべき観点を明確に絞り、Ａ・Ｂ・Ｃの三段階で速やかに評価できるようにしたため、これにより、生徒が主体的・協働的に活動する場面において目立つ生徒だけでなく、全ての生徒に対して観点を明確にした評価が可能となった。（［資料６］参照）。

また、ワークシートを生徒の思考力、判断力、表現力等の力がどのように変容しているかの過程が観察できるよう工夫したことで、生徒個々の成長を適切に把握することができた。協働的に学ぶ場面を見取る上で評価すべき点の精査は、今後、継続的に深めていく必要がある。

［資料６］　教員用評価シート

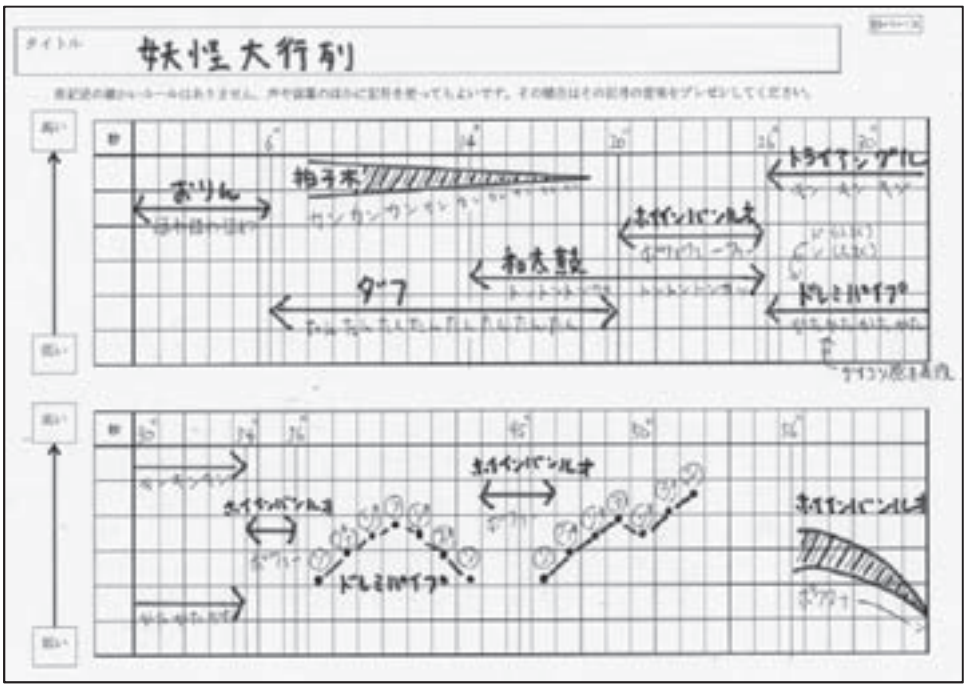


エ　声と口唱歌（くちしょうが）を活用した創作活動は生徒の音楽的な能力差を緩和し、多様な他者と協働して学ぶことのできる取組である（［資料７］参照）。その結果、生徒はそれぞれの感性を生かして音や音楽を非常に身近なものとして捉え、主体的・協働的に創作活動に関わり魅力的な作品を生み出すことができた。例に挙げる作品はこれまでに教育課程外で音楽教育を受けた経験のない生徒の作品である（［資料８］参照）。

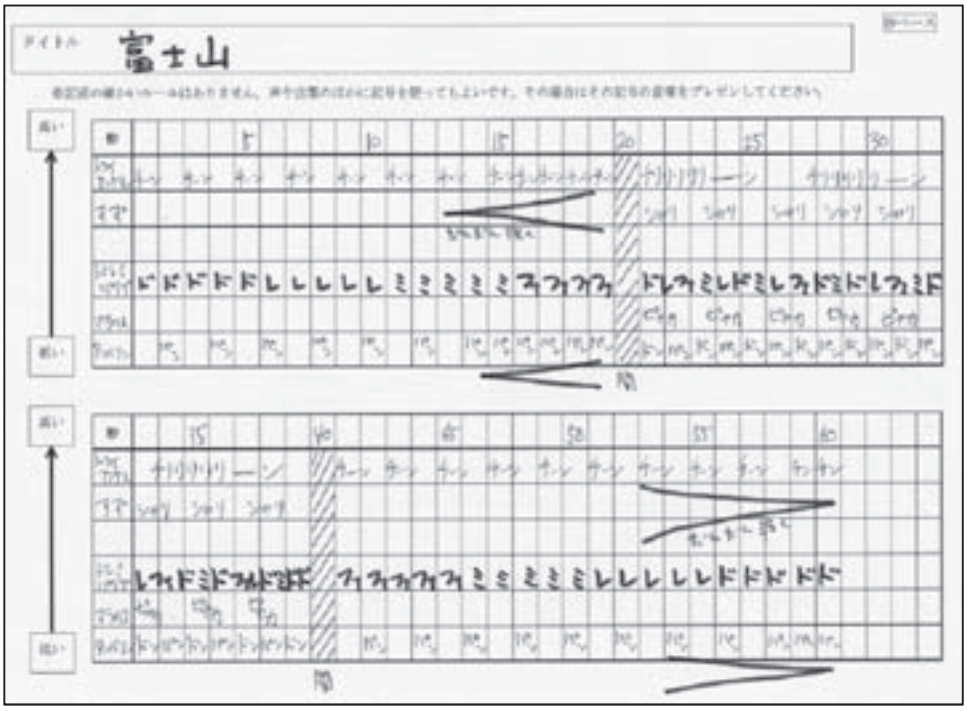
［資料７］　生徒が音や音楽の多様性に気付いたことが見取れる記述

自分は違うと思っていた音がグループのメンバーは良いと判断したりして、実際にその音を使ってみたら良い作品になって面白いなと思いました。

［資料８］　生徒が創作した作品の例



↑妖怪が行進している様子を打楽器を用いてイメージ豊かに表現している。口唱歌（くちしょうが）と強弱記号を併用した記譜の工夫も実際に演奏する上で理解しやすいものである。



↑富士山を登って降りてくる際の気持ちの高揚感を富士山の形もイメージに取り入れて作品にしている。

(7)　その他（使用したワークシート等）

ワークシートⅠ（抜粋）

① これから鳴らす楽器の音を声で模倣してみよう。模倣した音を文字で記録しよう。

写真					
名称	回音琵琶 （ホイ・イン・ペン・ルオ）	双先白鑼(ｼｭｱﾝ・ｸﾞｱﾝ・ﾊﾞｲ・ﾙｵ)	ダフ （片面フレームドラム）	チベット鈴 （おりん）	太鼓 （キッズわたいこ）
メモ					
個人 声・言葉で音を記す	①［強］ ②［弱］	①［空］ ②［水］	①［強］ ②［弱］	①［叩］ ②［触］	①［膜］ ②［側］
グループ 声・言葉で音を記す	①［強］ ②［弱］	①［空］ ②［水］	①［強］ ②［弱］	①［叩］ ②［触］	①［膜］ ②［側］

個人で考えて記述する欄と、グループで協力して記述する欄を設け、協働的な学びの前後で、生徒の思考力、判断力、表現力等がどのように変容したかを見取れるよう工夫した。また、対話的な学びを促すためにメモ用の余白を多く取った。

ワークシートⅡ（裏面）

③　作品について記述しよう(プレゼン準備と作品のまとめ用シート)

グループメンバー：

作品タイトル

曲のイメージ、テーマ、コンセプトは？

A. 中間発表まで	B. まとめ

曲のイメージ、テーマ、コンセプトを音楽にするために工夫したことは？

A. 中間発表まで	B. まとめ

中間発表を経て考えの深まりがあったかを確認できるよう、ワークシートを工夫した。

実践事例Ⅲ

教科名	芸術	科目名	音楽Ⅱ	学年	２学年

(1)　題材名、使用教材

ア　題材名　「雅楽『越殿楽』の曲想を味わい、篳篥や他の楽器の特徴を生かして表現しよう～篳篥の口唱歌を中心として～」

イ　使用教材　ワークシート、『越殿楽』篳篥の口唱歌譜、篳篥、雅楽で使用される楽器、『越殿楽』の演奏 DVD（宮内庁楽部、伶楽舎）

(2)　題材の目標

・雅楽で使用されるその他の楽器の音色や基本的な奏法の特徴に関心をもち、雅楽『越殿楽』の曲想を味わいながら、曲にふさわしい表現を工夫する。

・篳篥の口唱歌を歌い、雅楽『越殿楽』にふさわしい表現を工夫しながら演奏することで、「口伝え」で伝承されてきた我が国の音楽文化の意味や価値を探究する。

(3)　題材の評価規準

ア　知識及び技能	イ　思考力、判断力、表現力等	ウ　主体的に学習に取り組む態度
①篳篥の特徴（音色、リズム、旋律など）を知覚し、それら生み出す特質や雰囲気（フレージング、音程変化、間など）を感受しながら篳篥の口唱歌を歌っている。 ②篳篥の特徴を生かし、『越殿楽』にふさわしい表現を工夫しながら演奏する技術を身に付けている。	①『越殿楽』より篳篥の唱歌を歌い、音楽のニュアンス（フレージング、音程の変化、間など）を感受している。 ②篳篥の特徴を生かし、『越殿楽』にふさわしい表現を工夫している。 ③『越殿楽』曲想に関心をもち、篳篥やその他の楽器の特徴を感じ取り、どのように合わせて演奏するかについて思いや意図をもっている。 ④雅楽『越殿楽』の鑑賞や表現を通して、我が国の音楽文化との関わりについて理解を深めている。	①雅楽の歴史や文化、篳篥について関心をもって取り組んでいる。 ②篳篥の音色や基本的な奏法に関心をもち、口唱歌や演奏に主体的に取り組んでいる。 ③『越殿楽』曲想に関心をもち、篳篥やその他の楽器の特徴を感じ取っている。

(4)　題材の指導と評価の計画（５時間扱い）

時間	学習活動	評価の観点			評価規準（評価方法など）
		ア	イ	ウ	
第1時	雅楽の歴史や文化について知り、篳篥の構造や特徴を理解し、篳篥のリードを鳴らす。			●	【ウ-①】雅楽の歴史や文化、篳篥について関心をもちながら取り組んでいる。（観察、ワークシート）

第2時	『越殿楽』の曲想を感じ取り、口唱歌の楽譜の読み方を理解し、篳篥の口唱歌を歌う。	●	●	●	【ウ-②】篳篥の音色や基本的な奏法に関心をもち、篳篥の口唱歌や演奏に主体的に取り組んでいる。 （観察、ワークシート） 【イ-①】『越殿楽』より篳篥の口唱歌を歌い、音楽のニュアンス（フレージング、音程変化、間など）を感受している。 （観察、ワークシート） 【ア-①】篳篥の特徴（音色、リズム、旋律など）を知覚し、それら生み出す特質や雰囲気（フレージング、音程変化、間など）を感受しながら篳篥の口唱歌を歌っている。 （観察、発表、テスト）
第3時	篳篥の特徴（ベツ、塩梅）を感じ取り、『越殿楽』を演奏する。	●	●		【イ-②】篳篥の特徴を生かし、『越殿楽』にふさわしい表現を工夫している。（観察、ワークシート） 【ア-②】篳篥の特徴を生かし、『越殿楽』にふさわしい表現を工夫しながら演奏する技術を身に付けている。（観察、発表、テスト）
第4時	雅楽『越殿楽』で使われている楽器（吹きもの、弾きもの、打ちもの）について知り、それらが生み出す曲想を感じ取る。		●	●	【イ-③】『越殿楽』の曲想に関心をもち、篳篥やその他の楽器の特徴を感じ取っている。（観察、ワークシート） 【ウ-④】雅楽『越殿楽』の鑑賞や表現を通して、我が国の音楽文化との関わりについて理解を深めている。
第5時（本時）	篳篥の口唱歌と雅楽で使用されている他の楽器を合わせてグループで『越殿楽』を演奏発表する。			● ●	【ウ-③】『越殿楽』曲想に関心をもち、篳篥やその他の楽器の特徴を感じ取り、どのように合わせて演奏するかについて思いや意図をもっている。（観察、グループ発表、ワークシート） 【ウ-④】雅楽『越殿楽』の鑑賞や表現を通して、我が国の音楽文化との関わりについて理解を深めている。

(5)　本時（全５時間中の５時間目）

ア　本時の目標

篳篥の口唱歌と雅楽で使用される他の楽器を合わせてグループで『越殿楽』を演奏しよう。

イ　研究仮説に基づく本題材（本時）のねらい

仮説１「協働的な学びの場面を工夫することで、音楽や音楽文化と幅広く関わる力をより一層身に付けさせることができる。」についての検証を行った。本題材における協働的な学びの場面は大きく二点ある。一点目は、篳篥の口唱歌を歌い合わせることである。この活動により、口唱歌を歌うことによって音楽を伝承してきた我が国の音楽文化の意味や良さについて教師との対話、生徒同士による対話によって明らかにしていきたいと考えた。二点目は、雅楽『越殿楽』のグループ合奏を体験することである。篳篥の口唱歌と、雅楽で使用される他の楽器を合わせて演奏する活動を行うことによって、雅楽『越殿楽』の曲想を味わいながら、雅楽を演奏するために必要な事柄（間・ずれ・息遣い等）に気付き、表現を工夫することをねらいとしている。これらの学習を踏まえ、より一層、主体的に音楽文化に関わろうとする態度を育んでいきたい。第１時から第４時までは、個別の学習に充てる時間が長かったが、第５時では協働的な学びの場面を中心的な活動として設定した。評価方法については、第４時及び第５時のまとめとして記述するワークシートの設問を、それぞれ同じ趣旨の設問とした。それにより、「協働的な学びを経たからこそ、我が国の音楽文化と関わる力が一層身に付いた」ことを明らかにできるのではないかと考えた。

ウ　本時の展開

	学習内容・学習活動	指導上の留意点	評価 規準・方法
導入 5分	・雅楽『越殿楽』を通して学んできたことを整理する。	・雅楽の歴史や篳篥に関するエピソードに触れながら、これまでの復習をし、本時の学習の流れを確認する。	
展開 15分	・篳篥の口唱歌の１行目を歌う。 ・楽器の編成（吹きもの　弾きもの　打ちもの）や、各楽器の奏法について理解する。 ・グループ練習をする。 『越殿楽』の各楽器の特有の音色や奏法を生かし、各楽器の記譜の仕方を考え、グループで篳篥の口唱歌と合わせて演奏を創意工夫する。	・口唱歌を歌うことの意味について確認する。 ・実物の楽器、ワークシート、映像を交えながら前時の学習内容を確認する。 協働的な学びの場面 ・グループワークのポイント ① グループ（１グループ４名程度）に分かれ、各班に楽器を割り当てる。 ② 音源を聴きながら、篳篥以外のパートの奏法や合わせ方について試行錯誤をしながら合わせてみる。※指揮者は設定しない。	【ウ-③】 観察、グループ練習及び発表、ワークシート

展開25分	・グループ発表をする。	③ 各班に割り当てられた楽器が口唱歌と合っているかに留意しながらリハーサルを行う。 ・発表の仕方 ① 『越殿楽』の音楽の特徴を捉え、表現の創意工夫及び記譜の工夫した点を発表してから演奏する。 ② 班に割り当てられた楽器について注目しながら発表を聴く。	
まとめ5分	・全員で合わせて『越殿楽』を演奏する。 ・本題材全体を振り返りながら、学びや気付きをワークシートに記入する。	・グループワークを行ったことによる、新たな気付きに着目する。	【ウ-④】ワークシート

(6) 研究仮説に基づく本題材の振り返り

ア 協働的な学びとして、口唱歌を他者と歌い合わせる活動を行った（第２時）。まず、教師が篳篥の口唱歌を歌い、生徒に真似させた。次に、口唱歌の楽譜を見ながら歌い、楽譜の読み方や歌う際の留意点を隣同士で対話させることにより、口唱歌を歌うことの良さや意味を生徒同士の学び合いにより実感させることができた。口伝により伝承されてきた我が国の音楽文化への関心が高まっている様子も記述から読み取ることができた。（［資料９］参照）

［資料９］ 口唱歌を他者と歌い合わせる活動をしたことによる生徒Ａの記述

4、なぜ、唱歌によって伝承されてきたでしょうか？また、唱歌を歌ってみて感じたことを話し合ってみよう。

あなたの考え：①や参考音源がない時代、口唱歌を習い、歌うことで、曲の微妙な間や息の取り方が分かる。歌いながら手を叩くことによって、視覚的にも拍子の感覚が分かり、他の人と合わせやすくなる。
参考になった友達の考え：口伝えでつないできた伝承方法そのものに、日本の音楽の歴史、その良さや味わい深さを感じることができる。楽家のなかでの秘伝とされてきたため「口伝」という方法が最適だったのだろう。

イ 雅楽『越殿楽』のグループ合奏（第５時）の際、グループ活動について事前の説明として、「上手に演奏することが目的ではない。他の楽器と合わせることで、篳篥の演奏や越殿楽の鑑賞だけでは感じ取ることができなかった雅楽の味わいをグループで感じ取ることが目的である。」と生徒に明示し、協働的な学び合いの目的意識を明確にもたせて活動させることができた。また、第４時と第５時のまとめを同じ設問にしたことにより、協働的な学びを経て、より主体的に我が国の音楽文化に関わろうとする態度や、他者と合わせることによってこそ感じ取ることのできる雅楽の良さや美しさを味わっている様子を記述から読み取ることができた。（［資料 10 参照］）

［資料 10］雅楽『越殿楽（えてんらく）』をグループで演奏したことによる生徒Ｂの記述

・第４時のまとめ（協働的な学びの前）

> ４、雅楽『越殿楽』について、篳篥の演奏や曲の鑑賞を通して、１３００年以上も変わらない我が国の音楽の価値（意味）とは、どのようなものだと思いましたか。
>
> 楽器の形を変えずに１３００年以上も残ってきた音楽の音色から、昔の自然や風景を感じました。音を聴いて楽しむだけでなく、その中から感じることが価値なのではないかと思いました。木や竹など日本にある素材で作られていることからも、昔の人の知恵が感じられました。
> ものの価値や人の考え方がすぐに変わってしまう今の世の中にあって、雅楽の音色や楽器には普遍的な良さがあるから、今の時代まで残ってきたのだろうと思いました。

・第５時のまとめ（協働的な学びの後）

> まとめ　改めて１３００年以上も変わらない我が国の音楽の価値（意味）とは、どのようなものだと思いましたか。
> 『越殿楽』のグループ合奏を通して、音楽文化への関わり方、理解や印象、イメージに変化はありましたか？
>
> 越殿楽を合奏してみて、（例えば旋律がずれている部分など）このように「音楽」というのは成り立っているのだなと実感できました。いろいろな楽器と重なり合いながら聴こえる篳篥の音色は、いつもと違った風に聴こえ、また格別でした。
> 今の日本人、特に若者は昔から受け継がれてきた音楽よりも、海外アーティスト、アイドルなど、流行りの音楽を好んで聴きますが、越殿楽を皆で演奏したことによって、雅楽のかたいイメージがなくなり、「楽しいな」と思えました。ギターやヴァイオリンもかっこいいけど、楽箏や笙など日本の楽器にも、かっこよさを感じました。
> １３００年以上の歴史ある音楽。遠かった存在が身近になってきました。これから越殿楽を聴くたび、つい唱歌を口ずさんでしまいそうです！

(7)　本題材で使用したワークシート

・ワークシート NO. １、NO. ２（第１時～第３時で使用）

ワークシート NO. １、NO. ２（第１時～第３時で使用）
第２時のまとめ「なぜ、唱歌（しょうが）によって伝承されてきたのでしょうか？唱歌（しょうが）を歌ってみて感じたことを話し合ってみよう。」

NO．３（第４時で使用）

音楽【表現：器楽】雅楽『越殿楽』ワークシート NO．3

【第４時】雅楽『越殿楽』で扱われている楽器について知り、それらが生み出す音色を感じ取ろう。

1、雅楽『越殿楽』を鑑賞しよう。

■どんな音（音色）が聴こえてきますか？

■全体としては、どんなイメージ・雰囲気を感じますか？

2、雅楽について知ろう。

現存現存の伝統音楽である（雅楽）は、5世紀から8世紀にかけて（　　）大陸や、（　　）半島から伝わってきた音楽を、日本古来からあった音楽が融合してできた音楽です。

古い記録によると、752年の（　　寺大仏開眼供養）の時には盛大な（雅楽）と（　　）が演奏されたそうです。その後、主に（　　）音楽として伝えられ、（　　）時代に隆盛を極めました。現在では、（　　）庁）をはじめ、寺院・神社などで広く演奏されています。そこからは、日本の音楽の根源となる文化や歴史を感じることができます。

雅楽は、1300年以上も過ぎた今日、当時と同じ楽器、演奏形態、服装などで、今なお受け継がれ、鑑賞できることは、世界でも類をみないほど珍しい音楽文化です。

雅楽と呼ばれるものには、管楽合奏だけで演奏される（　　）と、舞を伴った（　　）があります。今回、鑑賞している『越殿楽』は（　　）の曲です。

3、『越殿楽』を聴きながら、①～⑤の楽器の音色を味わってみよう。

楽器名（読み方）、役割や奏法	どんな感じの音色で、どんなイメージですか？
①篳篥（　　） 主旋律を演奏する	※方言いその音色は『地上にこだまする＿＿の声』を表しています。
②龍笛（　　） やや装飾した主旋律を演奏する	※龍の笛という名の通り、その音色は『天と地の間、空を隔てる＿＿の鳴き声』を表しています。
③笙（　　） 音の重なりをつくる	※楽器で通ぶ通ったその音色は『天から差し込む＿＿』を表しています。
④楽琵琶（　　） 伴奏の音などを奏し、拍子の律をはっきりさせる	
⑤楽箏（　　） 旋律・リズムの変型を奏し、全体の速度を決める	
⑥鞨鼓（　　） 楽器開始を合図し、終わ終しを、音のメ ハ を表する。	
⑦鉦鼓（　　） 拍子を示す	
⑧楽太鼓（　　） 拍子や旋律の区切りを示す	

①②③を、（　　もの＝　　楽器）という。※三位一体の管楽器

④⑤を、（　　もの＝　　楽器）という。

⑥⑦⑧を、（　　もの＝　　楽器）という。

■西洋のオーケストラと比較し、共通する点と異なる点を挙げてみよう。

■雅楽の演奏は、どのようにして曲の奏者とタイミングを合わせるのでしょうか？

4、雅楽『越殿楽』について、雅楽の演奏や曲の鑑賞を通して、1300年以上も変わらない我が国の音楽の価値（意味）とは、どのようなものだと思いましたか。

☆最終問題（ふり返り）

【第５時パターン⑤】

雅楽と雅楽で使用される曲の楽器を合わせてグループで『越殿楽』を演奏発表しよう。

⇒1300年前の雅楽の音楽を再現しよう♪

第４時のまとめ

「雅楽『越殿楽（えてんらく）』について、篳篥（ひちりき）の演奏や曲の鑑賞を通して、1300年以上も変わらない我が国の音楽の価値（意味）とは、どのようなものだと思いましたか。」

・ワークシート NO．４（第５時で使用）

音楽【表現・鑑賞】雅楽 ワークシート NO.4

雅楽『越殿楽』の曲想を味わい、篳篥や曲の楽器の特徴を生かして表現しよう

～篳篥の吹奏を中心として～

1、【第５時】の課題

篳篥の吹奏と雅楽で使用される曲の楽器を合わせてグループで『越殿楽』を演奏発表しよう。

⇒1300年前の雅楽の音楽を再現しよう♪

2、使用される楽器名と特徴的な奏法を理解しよう。

楽器の分類	楽器名（読み方）、役割や奏法	特徴的な奏法
吹きもの１	①篳篥（　ひちりき　） 主旋律を演奏する	奏法１：打つ（たたく） 奏法２：（　　） ※「＿＿の声」を表す。
吹きもの２１	②龍笛（龍笛） やや装飾した主旋律を演奏する	奏法：回す ※「天と地の間、空を隔てる＿＿の鳴き声」を表す。
吹きもの３	③笙（　しょう　） 音の重なりをつくる	奏法：合竹 ※「天から差し込む＿＿」を表す。
弾きもの１	④楽琵琶（　がくび　） 伴奏の音などを奏し、拍子の律をはっきりさせる	奏法：掻撥
弾きもの２	⑤楽箏（　がくそう　） 旋律・リズムの変型を奏し、全体の速度を決める	奏法：開撥
打ちもの１	⑥鞨鼓（　かっこ　） 楽器開始を合図し、終わ終しを、音のメ ハ を表する。	奏法：正、諸来
打ちもの２	⑦鉦鼓（　しょうこ　） 拍子を示す	奏法：「金」「金金」
打ちもの３	⑧楽太鼓（　がくだいこ　） 拍子や旋律の区切りを示す	奏法：鼓（だん）、音（どう）

3、練習の仕方

・『越殿楽』の音源を繰り返し聴き、奏法を楽譜に記入する。

・唱歌を歌いながら、各楽器と合わせる。

4、発表の仕方

・作成した楽譜について説明する。

・唱歌と合わせて演奏する。

まとめ

雅楽『越殿楽』について、色々学習しました。

①篳篥の唱歌や楽器の演奏

②曲や使用されている楽器の鑑賞

③『越殿楽』のグループ演奏 ⇒今日はここ！

日本の音楽のなかでも、最も歴史のある音楽『雅楽』を通して、音楽文化を学んできました。

①改めて、1300年以上も変わらない我が国の音楽の価値（意味）とは、どのようなものだと思いましたか。

②今まで自分にとって遠い存在だったかもしれない『雅楽』を、実際にみんなと合奏する学習を通して、日本の音楽文化への関わり方、理解や印象、イメージに変化はありましたか？

第５時のまとめ

「（グループで学び合い、越殿楽（えてんらく）の合奏を終えて）改めて、1300年以上も変わらない我が国の音楽の価値（意味）とは、どのようなものだと思いましたか。」

Ⅵ　研究の成果

1　身近な題材を用いて生活の中の音や音楽と幅広く関わる力を身に付けさせるための授業の実施

映画音楽の題材を用いて器楽によるアンサンブル活動を試みた授業では、生徒にとって身近な楽曲と興味のある楽器を活用し、主体的・協働的に即興演奏を行うことができた。即興演奏のアイデアを図やイラストを活用して記述させたことにより、明確な思いや意図をもちながら生き生きと演奏している様子が見られた。アイデアを共有し、協働的に学び合うことにより、生徒一人一人が感性を働かせ、思考力、判断力、表現力等を音楽表現に活用する力を身に付けさせることができた。

2　声や口唱歌を用いて社会の中の音や音楽、音楽文化に幅広く関わる力を身に付けさせるための授業の実施

本来、伝統音楽等の演奏技能習得のために用いられていた口唱歌を器楽曲の創作活動に取り入れた。グループによる創作活動の過程で、生徒は互いの感性に触発されながら、社会の中の音や音楽に幅広く関わる力を身に付けていく様子を見て取ることができた。また、主体的・協働的に創作を行うにあたり、声や口唱歌を用いたことで、一層、音に対するイメージの共有がしやすくなった。音や音楽の働きについて、自己の思いや意図と関連付けながら理解を深めさせる創作の授業を実践することができた。

また、雅楽『越殿楽』から篳篥の演奏をする際に、口唱歌を歌う活動を取り入れた。口唱歌を歌うことにより、曲の雰囲気をつかみ、我が国の伝統音楽の良さや美しさを表現する際の重要な要素である間、微妙な息遣い、拍の伸縮等を生徒自身が感じ取りながら演奏できるようになることが分かった。また、口唱歌を歌う活動の際には一斉指導にとどまらず、生徒同士の対話を通して、口唱歌で音楽を伝えてきた歴史や音楽文化の意味や価値について互いに考え合っている様子も見られた。我が国の音楽のよさや美しさを深く理解し、より幅広く音楽文化に関わっていこうとする態度を養うことができた。

3　協働的な学びの過程を適切に見取るための評価の実施

協働的な学びの過程を適切に見取り評価するための、ワークシートの工夫及び評価シートの開発を行った。ワークシートについては、協働的な学びを行う前と後とでの生徒の記述や取組を比較しやすいよう設問の仕方を工夫した。それにより、教員は生徒の思考の変容をワークシートの記述内容から読み取ることができた。また、生徒自身も、自分の取組を振り返りながら学習を進めることができた。評価シートについては、協働的な学びの場面における生徒の活動の様子を記録することで、課題を解決するために知識を出し合ったり、技能を高めあったりする学び合いの過程を学習評価につなげることができた。

Ⅶ　今後の課題

1　「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「主体的に学習に取り組む態度」を一層関連付けることのできる協働的な学びの在り方

協働的な学びの場面について協議する中で、「生徒同士の話し合いや練習が、いま一つ活性化していないのでは。」といった意見が出た。その要因は様々考えられるが、例えば、音楽の学習における基礎的・基本的な知識及び技能に差があることが挙げられる。異なる中学校から進学してきた生徒は、それぞれ音楽的な知識及び技能の習得状況に差や偏りがある。より質の高い協働的な学びを実現させるためには、生徒一人一人の音楽に関する学力を把握し、適切に課題設定することが必要である。生徒一人一人の題材に対する、「知識及び技能」や求める「思考力、判断力、表現力等」、「主体的に学習に取り組む態度」を、正確に把握する方法について、更に検討し、協働的な学びが実現できる指導計画を構築していく必要がある。

2　協働的な学びの過程を適切に評価できるワークシート及び評価シートの開発

実践事例では、協働的な学びの前と後とでの変容を見取るためのワークシートの活用、グループ学習中の生徒の様子を観察記録として残すための評価シートの開発が行われたが、協働的な学びの評価の在り方については、実践方法が一つに定まらなかった。「協働的な学びの過程を見取るとはどういうことなのか。」といった、評価の対象や在り方に関する根本的な議論がなされた。評価シートを用いた実践では、教員から見て目立った発言をしたり、グループ内でリーダーシップをとったりすることのできる生徒は高い評価になりがちであった。協働的な学びを通して生徒に幅広く音や音楽と関わる力を身に付けさせることができたのかを、いっそう適切に見取ることのできる評価方法の開発・実践が必要である。今後は評価研究に焦点を当てた実践を行っていく必要がある。

3　小・中学校の実践を踏まえた『主体的・対話的で深い学び』の実現

『主体的・対話的で深い学び』の実現に向けた授業改善を充実させていくためには、より一層、学校段階間の連携を行っていく必要がある。小・中学校での学びを経て、高等学校の芸術（音楽）の授業においても生徒自身が「なぜ高等学校で音楽を学ぶのか、音楽の授業を通して何を学び、何ができるようになるのか」を強く実感できるような指導方法や評価を充実させるためには、各校種の教員同士が生徒の音楽に対する見方・考え方等について共有し合うとともに、生徒の学びを中長期的に捉えていくことが必要である。

平成30年度　教育研究員名簿

高等学校・芸術（音楽）

学　　校　　名	職　名	氏　　名
東京都立六本木高等学校	主任教諭	佐藤　孝太
東京都立田園調布高等学校	主任教諭	◎髙野瀬　一
東京都立深沢高等学校	教　　諭	中内　悠介

◎　世話人

〔担当〕東京都教育庁指導部高等学校教育指導課
指導主事　浅田　裕

平成 30 年度

教育研究員研究報告書
高等学校・芸術（音楽）

東京都教育委員会印刷物登録
平 成 30 年 度 第 135 号

平成 31 年３月発行

編集・発行　東京都教育庁指導部指導企画課
所　在　地　東京都新宿区西新宿二丁目８番１号
電話番号　（０３）５３２０―６８４９
印刷会社　康印刷株式会社

リサイクル適性Ⓐ
この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。